

# 金銭的に余裕がないと 感じている人は テレビをどう見ているか

メディア研究部 宮下牧恵

2019年11月にNHK放送文化研究所世論調査部が実施した、社会のさまざまな格差意識を探る「社会的不平等」に関する調査は、世界約40の国と地域の研究機関が、毎年1つのテーマを設定して共通の質問文で調査を行っているものである。このうち、日本の結果は「減少する中流意識と変わる日本人の社会観」として、本誌2020年5月号で報告されている。この結果を参照すると、「所得格差が大きすぎる」と感じている人が20年前（1999年）の調査より増加していることが指摘されている。また、世帯年収800万円以上の人全体に占める割合は減って、300万円未満の割合が増加しており、かつて、日本は一億総中流社会と呼ばれたが、人々の階層意識が「中流」から「下流」へとシフトしてきていることも指摘されている<sup>1)</sup>。

実際に、厚生労働省の「国民生活基礎調査」を調べると、1999年の平均世帯所得<sup>2)</sup>は626万円であったが、最新結果の2021年は545万7,000円となっており約80万円減少している<sup>3)</sup>。

しかし、現在のテレビ番組の作りは、人々の階層意識が「下流」へとシフトしていることや、所得が減少している実態と乖離してはいないだろうか。テレビに映し出される食事のシーンや

服装、旅行の企画などに、階層差や違和感を抱く人が存在しているのではないかと。そして、テレビは自分の声を代弁してくれるものではないと考え、テレビから離れ、他メディアに移行しつつあるのではないかと筆者は考えた。

そこで、実際にどのような感情を持ってテレビ視聴を行っているのか、まずは仮説探索を行うためのプレ調査を計画した。

### 年収300万円未満の人々へのプレ調査

プレ調査では、年収300万円未満の「シングルマザー」「身体障害者」「高齢単身者」「中高年ひきこもり」の人々各数名にデプスインタビューを行うこととした。

年収300万円未満の人々に絞ったのは、2022年の国民生活基礎調査の概況によると、世帯所得が300万円未満の世帯は、約34.3%と3割以上にのぼっており<sup>4)</sup>、暮らし向きが楽ではない人が多く存在していると考えたためである。また、前述した報告で、年収300万円未満の人々を「低所得層」、年収800万円以上の人々を「高所得層」として分析を行っていたため、これも参考にした。

「シングルマザー」「身体障害者」や「高齢単身者」「中高年ひきこもり」という属性を対象条件に加えたのは、金銭面のみによってテレビ番組に違和感を持つケースばかりではないと推察したからである。働いても平均所得に245万円以上満たない境遇、すなわちなんらかの社会的不利な立場に置かれた人々として4つの属性を想定した。

今回のレポートは、まず、プレ調査のテストケースとして、調査会社に依頼し、年収300万円未満の「高齢単身者」と「シングルマザー」各1名に、オンラインデプスインタビューを行っ

た結果の中から、特にテレビ番組に対する違和感について発言された内容を報告する。

調査では、1週間、メディア接触の仕方や、どのような番組を視聴したかを記録してもらうと同時に、視聴をしていて違和感を抱いた番組とそのシーンについて書きとめてきてもらい、インタビューを行った。発言については、一部読みやすく修正している部分があることに留意していただきたい。

### 高齢単身者のケース

今回の調査では、65歳以上79歳以下の高齢者の中で、10年以上一人暮らしをしている人を対象とした。理由は、単身生活が長い人のほうが、一人暮らし特有のメディアの使い方をしていく可能性が高いと考えたからである。調査対象者は、都内に住む60代の女性であり、離別により単身者となった。子どもはおらず、現在、午前中のみ働いて生計を立てている。普段は「おいしいものを食べながらの旅番組」を視聴することが多いという。仕事から帰宅したあとや家にいるときには、テレビ東京の番組をつけたままにしている傾向がある。テレビに録画機はついていないが、録画をすることはほとんどない。スマートフォンはほとんど検索を行うために使用しており、動画などの視聴には使っていないという。一方で、テザリングによってタブレット端末を使用して、Amazon Prime Videoのコンテンツや、ABEMAのコンテンツを視聴していることも多いという。

テレビに対する違和感や疎外感を抱く瞬間については、日本テレビの『有吉ゼミ』（2023年9月25日、19時00分～20時00分放送）の中で行われたという大食い企画について挙げた。食べ物を残すシーンが汚いという点が

違和感であったが、一方で、「ご飯が食べられなくて、子ども食堂に行かないと食べられないとか、給食を2食分食べる子もいるし、そんな子もいるのに、この番組でこんなに食べているんだ。でも（そういうものを楽しんで見ている人もいるから）しょうがないと思うところもある」という発言があった。また、テレビ東京の『水バラ なぁんで昼めし旅★極上のご飯を食べるため朝5時発！秘境&田舎の名店へ』（2023年9月27日、18時25分～21時00分放送）について、「わざわざ新潟まで、テレビ局のお金で、芸能人はギャラをもらって、不快というのではないが、いいよね～と思う。うらやましい。私もお金をもらって行きたいわ」という発言があった。

自身の金銭事情によって違和感を抱くという側面があるものの、社会全体の状況を見て貧困状態にある人も多く存在する中で大食い番組が行われていることについての疑問の声でもある。推測ではあるが、調査対象者は金銭的に余裕がないというものの、日々を明るく前向きに生きており、そうした生き方から、自分自身の問題よりも、社会的な問題への関心を強く持ち、こうした違和感の持ち方をしているのかもしれない。一方で、やはりテレビ番組でのお金の使い方が自身の金銭感覚とは合っていないという印象を持っているようだ。

また、違和感を抱いたテレビ局の企画やシーンについて、番組を制作する側に問題があると思うかという質問を行ったが、制作者には違和感を覚えることはなく、出演者に違和感があったという答えであった。筆者はテレビ番組の制作に携わっていた時期があり、こうした発言は意外に感じたが、一定量の視聴者が、テレビ制作者の意図や演出にそって出演者がとる言

動を視聴して、出演者に反発を感じたり、不快な思いを抱いたりしてしまうという現象が起きている。

## シングルマザーのケース

シングルマザーのケースについてみていく。都内在住で子どもが2人おり、2年前にシングルマザーになった。現在、子どもの世話が忙しいことや、体調の問題により仕事はしていない。貯金によって生計を立てている。「一人親家庭であることによって子どもがかわいそうと思われたくない」という気持ちが強くあると言い、家事と子どもと過ごす時間が大半の日常になっている。普段は子どもに合わせてテレビ視聴を行っていると言い、Eテレの教育番組やアニメ番組のほか、民放のグルメ番組や旅番組を視聴している傾向がみられた。インターネットはスマートフォンを利用して見ている。また、モバイルWi-Fiを利用しているが、YouTubeやInstagram、X(旧Twitter)やFacebookの利用はあまり行っていない。

テレビ番組のどのような部分に違和感を抱くかという質問については、フジテレビの『ウワサのお客さま』(2023年9月29日、20時00分～21時00分放送)の中で行われた、チェーン寿司店の「スシロー」に週5回通っているという人物が、独自にメニューを組み合わせて寿司を食べるという企画について、「スシローはそんなに高くないので行けるよね、というのがみえるのがイヤ。そんなことはないんだよ、と思っちゃうから。あまり高いお寿司屋さん週に何回も行くのはもちろん反感を買うが、このくらいなら行けるよねみたいな(ところに違和感を持つ)」という発言があった。制作者にとっては、ある程度安価な支出と感じて演出していることが、

収入が少ない人々にとっては、違和感や疎外感を生じさせている可能性がある。また、同じく『ウワサのお客さま』で、羽田空港に週8回通い、空港内の飲食店すべてに行ったことがあるという家族を取り上げた企画について、違和感を持ったという発言があった。

「羽田空港の人はすごい。食べ物屋さんが無数にあるのに全部行っている。そんなに行く?って思う。子どもたちも『今日はここに行ってもいいかな?』じゃなく、『今日はここに行く』で、だめと言われないのがわかっていて、なんのしがらみもなく、自由に好きなところに行ける環境なんだと思う。(中略)自分が子どもに気を遣わせちゃっている情けなさとか、うちの子もそういうふうに言いたいのもかもしれないのに、気を遣ってくれているんだなというので、ひがみ根性と、悲しさ、ふがいなさがある」

テレビに登場する家族と金銭的な感覚が異なることに違和感を持ったという発言であった。この発言の中にも、テレビ局が中流以上の家族を選択し撮影を行っていることについては特に疑問を抱いてはおらず、出演者の生活の仕方や金銭感覚に対して違和感の矛先が向かう傾向がみられた。

## 2つのケースの特徴

ここまで、「高齢単身者」と「シングルマザー」のケースをみてきたが、テレビ番組にどのような違和感があるかという点においての共通性は、出演する人々のお金の使い方が自分たちの生活感覚とは一致していないということが挙げられるだろう。また、自分の置かれている状況と異なる環境で生活をしている人に対して違和感を持つ傾向がみられた。

このほか、NHKの番組と民放の番組につい

て、放送局を区別して視聴しているわけではなかった。また、好きな番組であれば毎回視聴するとか、連続ドラマやドキュメンタリーなど長尺の番組は、リアルタイムだけでなく録画して視聴するといったことも行われていなかった。一方で、違和感を抱く傾向が高いものの、旅企画やグルメ番組をリアルタイムで視聴しているという共通点があった。

また、どのような理由で違和感を抱くのかを具体的に聞き取っていくと、その人の人生観や経験、価値観に影響されている部分も多くあり、必ずしも金銭的な理由にのみ依拠しているわけではなさそうである。もちろん今回のテストケースは、2ケースのみであるため、今後の調査結果を分析していく必要がある。

#### 今後の課題として

「高齢単身者」と「シングルマザー」各1名のインタビューを通してみると、金銭的に余裕がなく、生活が苦しいと感じている人は、テレビ局が制作している番組について、自分たちの金銭感覚と異なる演出がなされていることや、生活が苦しい視聴者をどのように考えているのかといった疑問を抱いている可能性がありそうである。一方で、「テレビとはそういうものだから仕方ない」ととらえている面も垣間みられ、今後の調査でその両面性について深めていきたい。

今後の調査の際には、「身体障害者」「中高年ひきこもり」も対象としていくが、社会が多様化する今、こういった要因がテレビ番組への違和感を生じさせるのかについては、慎重に分析する必要があると感じている。さらに、公共放送がどのように視聴されているのかも浮き彫りになるような質問を行う必要があると考えて

いる。

次回調査では、「シングルマザー」「高齢単身者」「身体障害者」「中高年ひきこもり」各3名程度にインタビューを行うが、その結果については改めて詳述したいと考えている。

(みやした まきえ)

#### 注：

- 1) 小林利行「減少する中流意識と変わる日本人の社会観～ISSP 国際比較調査「社会的不平等」・日本の結果から～」『放送研究と調査』(2020年5月号) P2-21  
[https://www.nhk.or.jp/bunken/research/yoron/pdf/20200501\\_7.pdf](https://www.nhk.or.jp/bunken/research/yoron/pdf/20200501_7.pdf)
- 2) 厚生労働省によると平均年収と同義である
- 3) 「2022（令和4）年 国民生活基礎調査の概況」II 各種世帯の所得等の状況  
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa22/>  
「平成12年 国民生活基礎調査の概況」I-2所得1.1世帯（世帯人員1人）当たりの平均所得金額  
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa00/>
- 4) 「2022（令和4）年 国民生活基礎調査の概況」II 各種世帯の所得等の状況  
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa22/>